

# 路翎『雲雀』試論 —書信から見た話劇創作—

奥野 行伸

## 抄録

本稿は路翎の処女創作話劇『雲雀』を取り上げ、主に作品の執筆理由と創作上の工夫を明らかにしている。脚本の執筆時期は1947年の南京で、国共内戦期という困難な社会状況下であった。その混沌としている中で、路翎はなぜ得意とする小説ではなく、話劇を起稿したのかについて探ると、劇団員との交流以外に、文芸の大衆化を模索していた過程が浮かび上がってくる。また、分野の異なる話劇創作は決して順調ではなく、特に第一幕と登場人物の人物形象に苦心していた。それらに着目すると、シューベルトの歌曲「雲雀の歌」の存在を見逃すことはできない。この歌曲を通して、登場人物の心理的距離や人物形象を如何に表出しているかについて検討を加える。本稿では、路翎の胡風宛て書信を主要な資料として用い、生活面から創作活動に至るまでの実態を押さえ、再度脚本を読み直すことによって、劇作家としての路翎の創作活動を明らかにしている。

## はじめに

劇作家としての路翎（1923～1994）はほとんど知られていないであろう。路翎は所謂「七月派」（胡風グループ）を代表する小説家であるが、解放後の所属単位が中国青年芸術劇院であったことからわかるようにいくつかの話劇も手掛けている。<sup>1</sup>ところが、彼の生涯において本格的に舞台上演されたのは第一創作話劇『雲雀』（1947）のみである。それゆえ、路翎が国共内戦期に国民政府の首都・南京で話劇の脚本を書いていたことは、知られているとは言い難い。また改革開放後、路翎の作品集や文集が出版されるようになったとは言え、路翎の話劇創作について、その実態はまだ十分に解明されてはいない。<sup>2</sup>

路翎は1923年蘇州で生まれ、南京で中学校へ進んだ時に日中戦争が勃発、武漢を経て重慶に難を逃れる。1938年に胡風（1902～1985）との邂逅を経て、作家活動を本格的に始め、兵士の内面世界を描いた事実上の処女小説「要塞退出以後」（1939）が雑誌『七月』に掲載されると、その後精力的に創作活動を展開する。重慶滞在時代に路翎は小説家として、中編小説「飢餓的郭素娥」長編小説「財主底儿女們」（上）（1945）などを出す。そして抗日戦争後、南京に帰郷してから執筆した作品が話劇『雲雀』になる。1947年6月に上演され、その後、脚本が翌年11月に希望社から単行本として刊行された。

『雲雀』を文学史の流れから見ると、45年1月に雑誌『希望』に舒蕪「主観を論ず」が掲載されるやいなや、その内容が唯心論であるとして瞬く間に解放区を代表とする作家たちから批判され、「主観」論争がおこる。この論争の流れは路翎にも波及し、1948年3月に胡繩の「路翎の短編小説を評す」（『大衆文芸叢刊』）が発表され、以後「胡風主観唯心論的文芸理論」の創作実践者として、この論争に関わっていくことになる。『雲雀』はそれらの論争が激化する前夜の作品と言え、比較的自由に創作活動した作品であると考えられる。そのような状況下で、小説家としてすでに文壇で地位を築いていた路翎にとって、話劇創作とは如何なる意味を持つものであろうか。

本稿は、路翎の執筆した話劇の中で本格的に舞台上演された『雲雀』に焦点を当て、彼が国共内戦期という激動の中で、なぜ新たに話劇創作へと進んでいったのか、その創作過程を追いかけたい。また、作品の登場人物像を鮮明にするために表現方法にどのような工夫がなされているのか。これらのことを明らかにするために、主として路翎の胡風宛ての書信<sup>3</sup>を手掛かりにして、南京帰郷直後の創作活動を分析していきたい。

### 1、話劇『雲雀』について

まず、路翎の胡風宛て書信（1947年6月4日付）からとりあげる。脚本の原稿を送り、上演日時を伝える内容で、「原稿は二日で届くでしょう。間に合わないかもしれません。しかし、やはり劇についてあなたの批評を頂きたいので、下旬にご来臨頂ければ幸いです。上演日時は21日から26日までです。」<sup>4</sup>とある。『雲雀』の舞台上演は1947年6月21日から南京国立戯劇専科学校附属劇団（演出は洗群、劇員は孫堅白、路曦、黄若海、張逸生ら）によって演じられた。会場は南京中山東路香鋪營の文化会堂で、600人から700人程度収容可能な劇場<sup>5</sup>であったらしい。上記の書信から路翎は胡風による脚本の批評だけでなく、来訪をも望んでいたことがわかる。

次に内容だが、『雲雀』は以下のように時間と場所が設定されている。時間は抗日戦争後まもない1946年春からで、場所は京滬線付近にある小さな街で暮らす李立人（夫）と陳芝慶（妻）夫婦の家の中という舞台設定である。次に登場人物を簡単に紹介する。歴史の中学校教員で教育問題、学校改革、壮丁や地主問題などに誠実に取り組んでいる李立人。資産家出身で貧しい生活に嫌気を起こして、しばしば李立人と衝突する音楽教員の陳芝慶<sup>6</sup>。陳芝慶の元恋人で現実から逃避しようとする王品群（教員）。李立人の親友で家庭と職場の両面で苦労を重ねる周望海（教員）という4名の若い知識人の生活上の苦悩とその破綻を描いた四幕物である。以下に各幕の梗概<sup>7</sup>を記しておく。

ある日の夕刻、李立人の家に周望海がやって来て、目下の境遇について感慨にひたっていた。李立人と陳芝慶は生活の困窮によって、多くの矛盾に直面していた。李は「一人一

人日常の苦しみを我慢し耐えること！今は楽しみを享樂し、栄光を追い求め、夢を見たりできる時代ではないのだ。現実において、理想を追い求めなければならない！僕がいつも信念を曲げないでいるのは旧中国との抵抗である。」と言って、陳を諭す。だが、彼女はもはやこの言葉を信じないで、平凡でこまごまとした現実的束縛を願わず、いつも浪漫的な生活にあこがれている。そんな陳に対して元恋人の王品群は「君はもともと一羽の雲雀で、大空に飛び歌うのが君の本来の姿だ。だが、今君は巣の中にいる」と嗜む。王の帰宅後、陳は思い悩み、李に八つ当たりするのであった。(以上、第一幕)

街には退役兵や露天商の老人があふれ、混沌としているなか、学校では理由もなく学生を退学にし、貯めていた補助金を流用して私腹を肥やす理事らに李立人は憤慨していた。周望海は学内での立場と陳芝慶の感情に注意するように促すが、李はあまり気に留めなかった。王品群はいつも李が留守の時に来て、陳につきまとい、「雲雀が飼われている」と言って彼女を誘惑する。彼女は音楽の授業の事で学校と折り合いがつかず、李に相談しようとするが、彼もまた仕事が忙しくて彼女を疎かにする。ついに、陳は李に別れを切り出す。李は驚きと憤りから答えられずにいると、周が路上で人に傷を負わされたと聞き、慌てて出ていくのであった。(以上、第二幕)

李立人の学生・程学陶は経済的困窮により上海へ旅立とうとしていた。李は彼に「どんな場所でも知識を得られることを忘れるな」と言って送り出す。李と陳芝慶の関係は日増しに厳しくなり、耐えがたいものとなっていく。陳は「私はこの生活や道徳が嫌で、平凡が嫌で、あらゆる難事に打ち勝ちたい。……」と癩癩をおこす。王品群は彼らの感情の不和に乗じて陳と一緒に上海へと行く。周望海は李に陳を捜すように勧めるが、李は自身の苦しみに耐えて、陳に理解されない現実生活と向きあっていく。(以上、第三幕)

一年後、陳芝慶は李立人のもとに戻るが、顔色は悪く情緒も不安定であった。彼女は李に許しを願い、彼を愛していることを告げる。陳はいろんな経過をたどり、彼女は李の正しさがわかり始めたのであった。彼女は常に人の世は「空虚」であると考えていたものの、李との出会いから自分自身を改造し、彼のために犠牲になれると思った。だが、現実の生活は全くそうではなかったと告げる。李は彼女を許すが、陳は自身の不貞を許すことができず、自殺を選ぶ。周望海は李に励ましの言葉を投げかけるのであった。(以上、第四幕)

この作品に関する評価はあまり記されていない。例えば、上演のために上海から駆けつけた胡風は、「『雲雀』、これは知識人の性格矛盾の悲劇である。(中略)『雲雀』の四人の登場人物は、四つの異なる典型的な性格を持っている。しかし本当の主演は、これら四人の人物を通して示される、冷酷、広大で轟然と進んでいく現実の歴史自身である」<sup>8</sup>と書き残している。また劉挺生は、「脚本は社会の圧迫を重く描き出し、知識人の心の傷痕を深く掘り起こしている。この二つの矛盾が混じり合い、性格と心の悲劇が演出されている。」<sup>9</sup>と

評している。上記の引用にある「冷酷、広大で轟然と進んでいく現実の歴史」や「社会の圧迫」と指摘されているものは、作品中の時代設定、社会背景という素材に当たる。では、それらの時代設定、社会背景とはいったい如何なるものであったのか。まずは、そのことを確認するために、1947年頃の路翎自身の生活とその社会状況から触れてみる。

## 2、作品執筆時の社会状況

胡風宛て書信に話劇『雲雀』に関する事項が初めて登場するのは、1947年4月16日付である。まずはその頃の路翎自身の実生活や歴史上の事件などを探ってみる。

『雲雀』では李立人の愛情に飢え、自身の進むべき道も定まらない陳芝慶が彼と諍いを引き起こすことにより物語は展開していく。まずは陳芝慶が癩癩を起す場面から取り上げる。

陳芝慶：(前略) 私たちにはたらいさえないので、ひとつ買ってほしいといつも言ってきたわ！私はもう二度とそこらの人と押し合いながらいっしょに水を汲むことはしたくない、と言ってきたわ。<sup>10</sup>

この台詞から二人は家計を最低限に切り詰めた中で過ごしていることが伝わってくる。隣の奥さんにたらいを使うことを咎められた陳芝慶は、理想を語るもののたらいさえ用意できない李立人に嫌気を差し、「私はこのような生活に我慢できない」と述べて、夫婦関係はますます悪化していくのである。この物語は経済的困窮から夫婦の諍いが増え、二人の心理的距離はしだいに遠くなり、感情のすれ違いが重なり破局へと導かれていく。抗日戦争時、李と陳は桂林で出会い、結婚後、中学教師として南京周辺に赴任する。李は下層社会出身の知識人で、不自由な生活には慣れている。だが、陳は資産家出身で幼いころより裕福な生活を送って来た。彼女は結婚時、父からの資金援助を断り、夫と貧相な生活を送りながら共に教育改革に突き進もうと誓ったが、生活用品の欠如などを契機として、理想は次第に崩れ、夫婦間の諍いを繰り返していくのであった。

作品の時代設定は1946年頃の南京周辺となっている。この頃の中国は急激なインフレの昂進を招き、民衆の飢餓状態が引き起こされていた。その最大の理由として、内戦遂行のための紙幣乱発、アメリカの借款・援助により、アメリカの余剰農産物が大量に輸入され市場を縮小させたことなどがあげられる<sup>11</sup>。インフレは低所得者層の生活に影響を与えることはいうまでもない。路翎自身その状況について、南京帰郷の前に、当地に対する印象を書信(46年3月25日付)で、「どうやら、南京一帯の「生活」は物価が高くてたまらないそうです。」<sup>12</sup>と記し、物価高に対する危惧を抱いていた。その後、南京に到着した時、

「今日、南京に着きましたが、災難を避けて逃げ延びているようで、滅茶苦茶な状態です。」<sup>13</sup>と、印象を記している。故郷・南京に戻った路翎を待ち受けていたものは、インフレによる物価高騰という苦難そのものであった。それから国民政府燃料管理委員会南京事務所の職に就いた後の47年3月13日付の書信でも「生活が困難になってきました」<sup>14</sup>とあり、物価高は収まりも知らず、『雲雀』の舞台リハーサルの始まった5月15日付書信でも「物価は非常に高騰し、さらに困難になりました」<sup>15</sup>と記して、物価高騰の深刻さを語っている。このように胡風宛ての書信からだけでも物価高騰という生活上の苦難がひしひしと伝わってくるのである。『雲雀』では、経済的困窮により間接的に精神が疲弊していく陳芝慶が描かれており、そのことは国共内戦期における物価高騰という社会状況の一部を作品に反映させているのである。

またほかに、作品において当時の社会状況と絡んでいるものとして、当時の学生運動が挙げられる。物語では、王品群の先導による学生の政府批判の壁新聞作成と、それによる学生の退学処分や、第二幕の最終場面で学生の程学陶が勢いよく登場し、「李先生、周先生が路上で人に傷を負わされて、役所へ連れて行かれました。」<sup>16</sup>という場面がある。これらの内容は路翎が脚本を修正し、上演のための舞台稽古が行われていた47年5月頃の状況と呼応するものがある。当時、中国全土ではインフレによる経済危機を発端とした飢餓の増加等が挙げられ、それによる民衆の反飢餓、反内戦のデモやストライキが頻発していた。なかでも、1947年5月南京において、経済危機による学生運動が勃発し、俗に言う南京五二〇運動<sup>17</sup>が発生した。書信にこれらの事件に関する記述を目にすることはできないが、路翎が市井の社会情勢について全く関心がなかったとは考えにくい。これらの南京で発生した学生運動は作品に直接的ではないが社会状況の一部として描出されている。

国共内戦期の社会状況に鑑みると、上記で取り上げた経済的困窮や学生運動、暴行事件等以外に、壮丁、農村（地主）問題、官僚の腐敗、学校改革など様々な社会問題があった。それらは、舞台上演までに発生した「現実の歴史」であり、役者も観客も関わりあう可能性のある困難な社会状況として、作品の素材となって投影されている。路翎は書信で繰り返される社会状況の不安や物価高に対する憤りなど、自身が最も注目して市井の関心事を作品に用いている。そのことは、観客も当然熟知している同時代の社会問題であるために、彼らの身近で何時でも起こり得る問題として意識を高め、共感を持って受け入れられたのではないと思われる。物語はその厳しい生活、社会問題を起因として、人間関係は纏れ出し、悲劇へと展開していくのである。

### 3、執筆動機と路翎の文芸大衆化

1946年5月5日、国民政府は約8年5カ月に及ぶ重慶の首都機能を南京に再び移した。

それに呼応するかのように作家たちも45年から46年にかけて、疎開地・重慶から南京をはじめとする各地へ帰郷し始めた。かつて抗日戦争期に路翎と同じく重慶の北碚に滞在していた老舍は渡米し、梁実秋は北京へと去り、重慶にいた胡風は上海へと向かった。46年5月27日、路翎も約9年ぶりに重慶より南京にもどる。抗日戦争終了後、彼は重慶の北碚にて事務と兼任講師を続けながら、『希望』等に短編小説を載せていた。その後、彼の妻・余明英が南京で職を見つけると、彼女と子供達は46年4月20日に路翎より先に重慶を出発する。そして、路翎自身は家族を追いかけたの帰郷となる。

先述したとおり、南京での苦しい生活は予想していたものの、その現実を体験することとなる。胡風宛て書信（46年6月6日付）では「書く所がなくて、記憶をたよって茶館で旅行記を書き終わりました。」<sup>18</sup>とある。路翎は南京帰郷後、妻の余明英の宿舎に暮らす予定であったが、そこが女子寮であったため、宿泊できず、知人宅を転々としていた。南京では当初住居にも相当苦勞し、執筆活動もままならなかったようだ。そのような劣悪な住居環境を契機として一つの邂逅が生まれた。胡風宛て書信（46年9月5日付）によると、「黄君のところに部屋の空きがあるのですぐに見に行きます。」<sup>19</sup>とある。この手紙にある「黄君」とは黄若海（?～1960）のことで、当時南京国立戯劇専科学校附属劇団の劇団長をしていた。彼との出会いのきっかけはわからないが、胡風宛ての書信ではこのあと12月14日付にも黄若海の名前が記され、それ以後、彼の登場頻度は増える。そして、47年3月13日付の手紙には、「いつも若海と話し合っています。それによって脚本を執筆したくなりました。」<sup>20</sup>と記している。さらに、胡風宛て書信、4月16日、23日、28日付にも話劇創作に関する内容が記されている。その中で、例えば4月23日付の書信では、「今、脚本を書いています。修正後すぐあなたに見てもらいたいのですが、今回はおそらく持参することはできません。」<sup>21</sup>とあり、話劇創作の状況を胡風に伝えている。また、この路翎の話劇創作に関して、胡風も回想録の中で以下のように指摘している。

「チェーホフ断片」を書いていた時に、中国でチェーホフのような戯曲が生み出され、厳肅かつ真実の人物を描き出すことができるようになるだろうかと考えたことがあった。その後、路翎とこの点について話したことはあったが、彼に書くように勧めたことはなかった。南京に住んでいた彼は、演劇界の友人と常に交際しており、戯曲を書こうとする意欲も芽生えていたのかもしれない。彼が四幕劇の『雲雀』を送ってくるとその日のうちに読んでしまった。<sup>22</sup>

ここにある「演劇界の友人」とはもちろん黄若海のことであろう。これらの経緯を見ても明らかなように、路翎が話劇『雲雀』を編むきっかけとなったのは、南京帰郷後の住宅

難を契機として、南京国立戯劇専科学校附属劇団の劇団長をしていた黄若海と知り合い、語り合うことによって、話劇を創作する意欲が高まったことが少なくとも話劇創作の主な動機と考えられる。

ところが、黄若海との出会い以外に、もう一つ話劇を創作した理由が挙げられる。次に路翎の回想文を取り上げる。

胡風は「戯劇は注目に値するテーマで、とても影響がある。いつか脚本を書きなさい。」と語った。(中略)

胡風は大衆化、通俗的な仕事を希求し、『七月』を刊行する時、大衆版も発行したかったが、成功しなかったと言い、今、雑誌『希望』も出すが、思うにそれも成功は難しいと語った。彼は時間があれば、簡単なもので、大衆的な作品を書いて試してみるとよいと語った。また「いつか脚本を書きなさい。」と言い、ある時は脚本が上演できれば、大衆性をも持ち得ると語った。

私は話劇『雲雀』を創作した。その後、胡風は南京に来て上演を見た。彼は南京で話劇を上演出来れば、とても有益で、精神を奮い立たせることになる」と語った。<sup>23</sup>

ここで指摘しておきたいことは、路翎の回想文で「いつか劇本を書きなさい」と記している点と、先に引用した胡風の回想文で「彼に書くように勧めたことはなかった」と記している矛盾点である。黄若海と出会う前の路翎は、重慶で妻と話劇を数回鑑賞する程度で、劇に関する記述はほとんどなく、関心もあまりなかったように思われる。それゆえ、胡風が「彼に書くように勧めたことはなかった」と記している点も、これまで劇作への関心が希薄だった路翎を裏打ちできる一文として読み取ることができるであろう。路翎の場合、習作期から南京帰郷まで小説家という範疇があまりに大きく、劇作への関心があまりにも希薄だった為に、上記の矛盾点が生まれたのではないかと思われる。両者の回想文について、二人とも55年の逮捕以後、長い収監生活を経て回想した文章であることを考慮に入れると、事実と証言に記憶違いがあってもおかしくはない。また、胡風の回想文が47年の南京時代について書かれているのに対して、路翎の文章は「今、雑誌『希望』も出すが、」とあるように、一部に重慶時代を回顧しているものと読み取れ、彼らの回想文を比べると、時間的差異が生じていたのかもしれない。その点を考慮に入れたとしても、路翎の話劇創作には胡風の助言した「大衆性」<sup>24</sup>の存在が大きかったことが回想文より伝わり、強調されている。『雲雀』は、路翎が数年来温めていた「大衆化」という構想を実現した作品とも言える。そこで、路翎が記している「大衆化」「大衆性」の流れについて聊か取り上げておく。

「大衆化」とは、元来 1930 年代に左翼文壇において起きた文芸大衆化運動を契機とするもので、魯迅も大衆化論の文章<sup>25</sup>を發表し一時文壇の論争ともなった。所謂「七月派」に  
とっての文芸大衆化は胡風自身が編集した雑誌『七月』で、『抗戦以来の文芸活動動態と  
展望』<sup>26</sup>という座談会記録に登場する。その中で適夷は座談会の最後のテーマ「今後の文  
芸工作方面の見込み」で、『七月』掲載のルポルタージュ作品によって、大衆との懸隔は  
消え去ったとして、文芸を大衆化する好機としている。だが、その後戦争の激化や雑誌の  
停刊などにより、文芸の大衆化という命題は実践できずにいた。そこで、路翎は胡風たち  
が果たさずにいた命題を南京帰郷後に黄若海との邂逅や胡風からの劇作への奨励を契機と  
して、話劇という形で創作を始めるのである。文芸の大衆化にあたっては、文学作品を大  
衆に行き渡らせる最も効果的な手段として、歌曲や芝居を考えるのは、極めて自然なこと  
である。路翎自身、例えば評論「對於大衆的理解」<sup>27</sup>の中で李季の民歌「王貴与李香香」  
を大衆化への大きな糸口として高く評価している。路翎の場合、所謂「七月派」の作家や  
詩人たちが未だ果たしていない文芸大衆化という命題を実践するために、話劇を創作する  
ことで新たな境地を切り開いたのである。解放後、路翎の所属単位になったのは、中国青  
年芸術劇院（後の戯劇家協会）である。彼は解放後も話劇創作を試みるも、所謂「主観論  
争」の激化など文芸界の諸事情によって、彼の話劇は上演の日の目を見ることはなかつた。  
その事実だけを考慮しても、唯一上演された『雲雀』は評価される作品とも言えるであ  
らう。

『雲雀』の創作動機には、まず書信に記されているように南京の住宅難を契機として、  
劇団員・黄若海との邂逅によるところが大きな外因であった。が、路翎が抱いた内因とし  
て、舞台演劇を催すことで文芸を大衆に普及させたいという思いがあった点も指摘してお  
かなければならない。

## 4、歌曲と人物形象

### 4-1、表現媒体としての歌曲

本稿「はじめに」で、路翎は『雲雀』を執筆する以前は主に小説を創作していたことに  
触れた。それらの作品に対する評価として、例えば、近藤龍哉氏は「路翎は、知識人以外  
にも、中国の様々な階層の人々を描いています。その特徴は、当時の進歩的文芸界の多く  
に見られる「公式主義」「客観主義（傍観主義）」に対抗して、「リアリズム」の可能性を  
より広げようと、方法的冒険を試みていることです。今回取り上げるのもその特徴のよく  
出た作品（筆者注：「王の家のばあさまと彼女の子豚」）のひとつで、ばあさまの心理の過  
程を描くことを表現の中心に据えています」<sup>28</sup>と評価している。小説にて登場人物「の心  
理の過程を描くことを表現の中心に据えて」きた路翎にとって、分野の異なる話劇の創作



は決して順調ではなかった。『雲雀』執筆当時の書信に「模索しながら脚本を書いています。およそ失敗するでしょう。しかし、必ず書き終えなければなりません。」<sup>29</sup>と記している。さらに、作品を書き終えた時にもこのように書き留めている。

私はこの話劇の内容は悪くないと自信を持っています。しかし舞台になると、私は少しもわからず、想像つかないことすらあるのです。今、上海へ手紙を送る前に、彼らに第一幕を改めることを約束しました。私はあなたが先に読んで、意見をくださることを望みます。<sup>30</sup>（傍線筆者）

上記の二通の書信から日々創作に格闘していたことが窺え、また話劇創作と言う分野の違いからくる戸惑いなどが読み取れる。その不安からか、路翎は脚本完成後、胡風に作品を真っ先に送って意見を切望している。

小説と話劇の脚本との差異を考える場合、最初に指摘しなければならないことは表現媒体の違いであろう。小説で描かれる人間の心理は、外から見えないものを文章によって読者の心理の内部に分け入って表現されるものである。それに比べると、脚本は台詞やト書きから俳優の表情・演技によって表現されるものである。ゆえに、脚本は登場人物の形象において、その表現方法の工夫が小説よりも迫られると言えよう。

先に述べたように、『雲雀』は現在（1946年春～夏）を軸として、国共内戦期の社会や教育界などの話柄にのぼり、各人物の理想とそれを実現させるための思惑が深く陰翳をもたらすなど、作品は登場人物が少ないながら意想外に広く深い世界を内包している。一方で、その作品世界の広がりもあって、主要登場人物は心理的距離（遠さ）をもって配置されている。例えば、王品群から陳芝慶へ、陳芝慶から李立人へ、李立人から王品群へ、という愛情（欲望）・執着・憎悪といった男女間の三角関係は、鮮明な対話を軸にして表出されている。だが、その発した言葉が相手に届くという意味での対話は、第一幕ではそう多くみられるわけではない。逆に言えば、第一幕で用いられた心理的距離や感情のすれ違いこそが、実は『雲雀』の登場人物が体现するある表現媒体によって表出されている。上記の書信で路翎が「第一幕を改める」と記しているが、その具体的な修正内容は定かではない。ただ、第一幕に目を凝らせば、作品上のある表現媒体を探り当てることができる。それは第一幕でしか歌われない歌曲の存在である。なぜなら、それによって路翎が試みた脚本の工夫を垣間見ることができるからである。

この章では、まずこの歌曲の連携・配置を検討し、表現方法や人物形象を考察していきたい。そうすれば、路翎が試みた脚本の工夫を理解できるだけでなく、作品の主題についても大きな手掛かりをつかむことになると思われるからである。脚本では歌曲が歌われる

場面が四箇所あり、その何れもが第一幕に登場する。これより歌曲に纏わる台詞を取り挙げて検討を加えていくことにする。

#### 4-2、第一幕と「雲雀の歌」

まず先に、『雲雀』という題名の由来となるものが示されている台詞がある。その部分は王品群の台詞で、「歌おう、我々の「雲雀」の歌を。(ト書き：黙ったまま彼女を見ている) 君はシューベルトがこの歌をどうして書いたか知っているだろう。」<sup>31</sup>とある。この引用文から類推するに、この作品の題名は、シューベルトが作曲した歌曲「聴け、聴け、雲雀の歌を」(以下「雲雀の歌」と略す)から取られていると考えられる。その詳細は後に述べるとして、その「雲雀の歌」の初出の場面から見ていく。李夫婦の家の外で、ある少年が歌う『思郷曲』<sup>32</sup>を聞いた王品群がそれに呼応するかのよう歌い出す。

王品群：(前略) 空でさえずるヒバリよ聞きなさい、お日様はもうのぼってきます！——  
(ト書き：李立人に向かって、切実に、一方で行ったり来たりして) 学校の事は、みんなで行おう！……学生を立ち上がらせるのだ！我々はここで無駄に留まっていたはいけない！ (ト書き：また歌う) ヒバリよ聞きなさい……<sup>33</sup>

この場面で歌われているのは、シェークスピアの戯曲『シンベリン』に登場する「聴け、聴け、雲雀の歌を」の詩<sup>34</sup>にシューベルトが曲をつけたものである。戯曲『シンベリン』において、この詩はクロートン(王妃の先夫の息子)がイモーゼン(シンベリンの先妻の娘)の気を引くために楽師たちを呼んで甘い曲に歌詞をつけて演奏したものである。つまり、『シンベリン』では恋愛上男女間の心理的距離を埋めるために効果的に歌曲が演出されている。上記に引用した台詞で興味深いのは、まず王品群が李立人と陳芝慶に向かって「雲雀の歌」を歌うことである。台詞に、王品群が「学校の事は、みんなで行おう！……学生を立ち上がらせるのだ！」とあるように、ここでは異性との心理的距離を埋めるために歌うのではない。同僚に対して、学生運動への参加を直接言葉で訴えるのではなく、歌曲を用いて間接的に促しているのである。つまり、学校の問題に取り組む姿勢の違いから生じた教員間の心理的距離を縮めるために、歌曲が用いられており、「雲雀の歌」は人と人の心理的距離を縮める方法として用いられていると定義できよう。

二箇所目は、先ほどの王品群の台詞の後、すぐに隣人が登場し、本稿第二章で述べた陳芝慶が隣人にたらいの使用を咎められる場面で歌われる。その直後、ト書きに「(王品群は窓辺に立って、重ねて「雲雀の歌」を歌っている。)」とある。その光景は、隣人に対してひたすら「すみません」と謝る陳芝慶の姿に対して、まるで何かを問いかけるように

歌っているのである。家庭環境が変わり、経済的困窮を強いられている陳芝慶の生活を目にした王品群は、深い同情を寄せつつ、現在の境遇から目覚めさせようとして、以後頻繁に李立人宅を訪ねるのであった。ここでの「雲雀の歌」の意味するものは、初出の場面で王品群と二人の夫婦との心理的距離を縮めようとするものではなく、後の四箇所目で触れるが、王品群が陳芝慶に現在の経済的困窮から目覚めさせようとする気持ちが初めて「雲雀の歌」に込められているのである。つまり、この場面では後に陳芝慶の人物形象に関わるものとして、脚本の展開上の「伏線を敷く」という創作技巧が凝らされていると言えよう。

次に見る「雲雀の歌」は、陳芝慶が日々の苦しい生活に嫌気が差し、夫にわがままを言う場面で登場する。台詞で、李立人に「君は小説の中にある幻想を追い求めている！出来上がった楽園を求めている。」<sup>35</sup>と戒められて、陳は「ひょっとすると、そのとおりかも」と語る。続くト書きに「(突然奇妙にも明るくなり)」とあって、「雲雀の歌」を歌い始めるのである。ここでは、李の戒めに納得して陳が歌い出すことにより、夫婦間の目に見えない心理的距離や感情のすれ違いを一時的に埋められた陳の喜びの気持ちが歌曲を通して表現されている。陳にとって「雲雀の歌」は、喜びの歌でもあり、好きな曲でもあると読み取ることができる。

最後の場面は、陳芝慶が経済的困窮から「私にはいくつかの美しい設計図があって、それらは簡単に陰鬱な生活と比べることはできないわ。他人にはわからない。わたしは誰からも必要とされていないように思うの。」<sup>36</sup>と語り、人との心理的距離や感情のすれ違いを増幅させていく様子が語られる。そのような陳に対して、彼女の昔を知る王品群は彼女に以前の姿を取り戻させるために、彼女に問いかける台詞が置かれている。

王品群：(前略) 子供よ！君はもともと一羽の雲雀で、大空に飛んで歌うのが君の本分だ。だが、今、君はこの巣の中にいる。<sup>37</sup>

これを聞いた陳芝慶は（ト書き：「ずっと黙ったまま立っている。異常に震え、悩ましげに、自ら内心の声を発するように」）「雲雀の歌」を歌い出すのであった。この引用文にある「君はもともと一羽の雲雀で、大空に飛んで歌うのが君の本分だ。」と王品群が語ることによって、陳は経済的困窮や感情のすれ違いなどから生じた閉塞的状況と決別し、「大空に飛んで歌う」という自由を求める気持ちを募らせていく。それまでの苦しい思考過程は、ト書きに「ずっと黙ったまま立っている。異常に震え、悩ましげに、自ら内心の声を発するように」とあるように表出されている。そして、ついに陳自身が「雲雀の歌」を歌うのである。

この場面では、陳芝慶の人物形象に繋がる点が二点挙げられる。一方は、陳芝慶が「大空に飛んで歌う」という台詞に象徴されるように、束縛のない自由な世界へ飛び立とうとする気持ちを形象しているのが「雲雀の歌」である。もう一方は、夫との心理的距離から生じた苦悩を悲痛な叫びとして歌ったものが「雲雀の歌」である。この二つに形象される概念は、胡風が指摘している「知識人の性格矛盾」を表出し、歌曲によって上手く演出されている。物語はこの後「雲雀の歌」は歌われることはないが、「雲雀の歌」の「雲雀」は、陳芝慶を印象づける言葉として物語は展開されていく。

以上、第一幕での歌曲の効果による表現方法と人物形象について、筆者の読解を呈示した。上記の四箇所場面を通して言及すると、「雲雀の歌」は他者との心理的距離を縮めようとする手段として、まず登場する。そして、後に女性主人公を形象するため、作品の展開上、伏線を敷くという創作技巧が凝らされている。三箇所目では、夫婦間の心理的距離を縮めることができた喜びとして歌われている。最後の場面では、女性主人公の自由を求める気持ちを形象している一方、悲痛な叫びを印象づける歌として、「雲雀の歌」が配列されていることが読み解けた。教師間、夫婦間、一对の男女間の容易には伝えることができない混沌とした生態を台詞やト書きからだけでなく、歌曲の演出によって、人間の内面にある距離感を描出し、創造しているのである。特に作品全体へ影響を与える構成としては、陳芝慶の現在の閉塞した生活から抜け出たいという気持ちを浮かび上らせ、その心情を感じさせる媒体となっているのが最後の場面の「雲雀の歌」である。王品群の台詞にある「君はもともと一羽の雲雀」は陳の人物形象を印象づける台詞となり、彼女の人物形象において重要な役割を果たしていくのである。

#### 4-3、王品群と「雲雀の歌」

脚本の創作に当たり、路翎は47年5月29日付の書信で登場人物の具体的な人物形象について言及している。その部分を引用する。

主に修正したのは、王品群が学校にやってきて先生となりながら、一人でもう一つ関係を発展させ、ある副刊の編集を兼ねる。学校に来てちょうど一カ月の頃、出しゃばって学生を煽動する。その目的は裏で理事会を通して、元校長を打倒しようと試みる。李立人と周望海は彼のこのようなやり方が嫌いだが、陳芝慶は彼に接近する。しかし、問題が起り失敗し、学校は騒ぎを起こした学生を退学させようとする。だが、王は一言も発せず、すべては李と周が引き受けることになり、彼らはこの事に巻き込まれざるを得なくなる、という箇所です。

このように修正すると、周囲の状況がはっきりと設定でき、事件の発展も外部の繋が

りをもつようになりました。<sup>38</sup>

ここで記されているのは主に第二幕の内容である。王品群の人物形象について、路翎が相当苦労していたことが窺え、その具体的な修正が記されている。書信によると、どうやら王品群に関する初めの構想は、教師でなく、学校周辺の出来事とも無関係であったようで、大幅な差し替えが成されている。修正後、王品群を教師として据えることにより、他の三人の主要登場人物との関わり合いが生まれ、違和感なく物語を展開できるようになったのである。

この節では、王品群の人物形象について「雲雀の歌」から再度考えてみる。第一幕の初出の場面では、王と二人との心理的距離を埋めるものとして、対話に加えて歌曲がまず用いられていた。その後「雲雀の歌」は、陳芝慶の自由を求める気持ちを象徴し、心理的距離や感情のすれ違いから生じた悲痛の叫びを象徴するものとして登場する。だとすると、王の人物形象にとって「雲雀の歌」又は「雲雀」とは如何なる作用があるのか。例えば、第二幕で学生が退学させられることで、王は上海に行って作家活動に専念する決意を固める。そして、陳に上海行きを促し、再出発を図ろうとする。王品群の台詞に、「実を言うと、俺の希望は小さくて、ただいつも芝慶に会うことだけなんだ。(中略)俺は君が歌う「雲雀の歌」を聞くのが好きなんだ。」<sup>39</sup>とある。ここで「雲雀の歌」が意味するものは、陳の精神的な覚醒を促すのではなく、王が彼女に対し、自身の愛情を告白するという意識下の欲望を補完するものとして語られている。つまり、脚本上この箇所は陳に愛情を告白し、駈落ちへと導いていく重要な台詞であり、劇的な構成とも呼び得る決定的な帰結を含んでいる。その後、王は愛の略奪者を演じ、消え去る役を演じている。脚本において「雲雀の歌」の「雲雀」という言葉は、陳芝慶の束縛のない自由な世界へと飛び立とうとする気持ちと心理的距離や感情のすれ違いから生じた悲痛な叫びを象徴するものである。が、一方で、王が陳へ愛情を伝える劇的な台詞として語られており、やがて悲劇へと進む『雲雀』のプロット展開において、重要な役割を果たしているのである。第一幕で王品群が歌った「雲雀の歌」は、創作上心理的距離を縮めるという定義、又は技巧面に属するものであった。「雲雀の歌」の「雲雀」から形象される王品群の人物像は、陳芝慶を経済的困窮、閉塞的な状態から目覚めさせようとする人物像と、彼女を慕うという意識下の欲望を抱いている人物として投影されているのである。

話劇『雲雀』に登場する「雲雀の歌」をどう解釈するかは、この作品を理解する上で重要な鍵となる。それらを考察して明らかになったものは、第一幕の「雲雀の歌」の配列により、台詞やト書きによる対話だけでなく、歌曲という音楽の要素を取り入れることにより、登場人物の心理的距離の存在を観客に提示し、お互いの距離を埋めることができ、又

はできない作用として構築されている点である。また、経済的困窮から抜け出て「大空に飛んで歌う」という陳芝慶の束縛のない自由な世界へと飛び立とうとする心境を象徴させる言葉が「雲雀」であり、夫との心理的距離から生じた苦悩を悲痛な叫びとして歌ったものでもあった。さらに、その象徴は陳芝慶を慕う王品群の意識下の欲望を顕在化させるものでもあった。

## 5、「純潔」から「聖潔」へ

最後に話劇『雲雀』の主題について些か触れておきたい。『雲雀』の第三幕までの内容は、経済的困窮を契機として、夫との心理的距離を埋めることができず、遂には自身の理想を見失い、墜落ちしてしまう若い知識人陳芝慶の苦悩が描かれていた。この内容は俗にいう解放区の商品のように単純に啓蒙活動を呼び掛けるといった人民のための物語ではない。この脚本について、路翎は書信で、「今回の脚本は直接社会の事件を書いたものではなく、内々の生活上の事件を書いたのです。」<sup>40</sup>と書き留めている。作者の構想では、社会の内面に隠れて決して取り上げられない心理的事件を主要テーマとして取り上げたのであった。

作品では極めて対照的な若い知識人が登場する。李立人、周望海といった二人の若い知識人は、前途ある中学生のために力を合わせて教育に邁進し、自分の生活はあえて犠牲にしなければならないという冷厳な姿勢をとる。そして、横暴な官僚を前に、生徒一人一人に生きる糧を見つけさせ、悲痛な思いを心の奥にたたみ込んで進んでいく姿を作者は描いている。彼ら二人は肯定的で模範的人物である。もう一方の陳芝慶、王品群といった二人の若い知識人は、悲観主義、享楽主義に属する人物で、前者とは相対的な人物として描かれている。作品ではこれら相対する二組を軸に物語は展開していく。陳芝慶は経済的困窮と閉塞した状況から飛び立ちたいと希求し、その心情は「雲雀の歌」によって象徴化されている。物語が展開するうちに、陳と王は性格的な弱さを露呈し、自分のために夫や仲間を捨てて、新しい世界へと旅立つ。特に、陳については、当初、夫と共に貧しい生活に耐えようと誓うものの、日々の生活において彼女の資産家階級出身という性格上のもろさが露呈し始め、「時代と私との距離は遠くなり…」<sup>41</sup>と疎外感を感じるようになる。その後、陳は孤独に陥り愛情に飢えた女性として描かれ、夫との心理的距離から生じた苦悩を悲痛な叫びとして象徴したものが「雲雀の歌」でもあった。陳は遂に夫への愛情を失い、自身から目を背けるように王の誘惑にすがるのであった。悲劇は最終幕の夫婦の再会をもって頂点に達する。自身の誤りを悟り、李のもとに一年ぶりに戻った陳は彼に許しを請い、自身の弱さをさらけ出し、心情のすべてを吐露する。その場面を見る。

陳芝慶：（前略）私たちは現実を恐れるべきでなかった。私たちは元々遙か遠くに愛を忘れ去るか、距離をおいて愛し合うべきだった。あなたは私をわかっているわ。私は幼い頃から上流階級の教育を受けたいいわゆる名門の女性よ。私は苦しい生活に嫌気が差して、わがままを言ったけれども、最後に私の血筋は高貴で、下層の女性ではないと悟ったの。あなたもそうでしょう？私の弱点、誤りは恐らくここにあるわ。（中略）私は旧社会出身で、やはり、新しい生活を見ることはできないの。私はずっとあなたのために犠牲となり、或いはあなたが私を変えてくれるものと願っていたわ。しかし、現実の生活は全くそうではなくて、私は犠牲の情熱を失くし、あなたも私を気にかけなくなったわ。<sup>42</sup>

この引用文は陳芝慶が自殺する直前の長い台詞の一部である。この場面では、夫との新しい生活に望みを託しながらも「名門」出の知識人ということが災いして、努力しながらも経済的困窮に耐えられず、感情のすれ違いによって挫折していった彼女の心の葛藤が巧みに述べられている。特に、最後の「あなたも私を気にかけなくなったわ。」という台詞には、夫との心理的関係を失い、精神的に追い詰められていった心境が語られている。そうした彼女の唯一の願いは、「私はあなたの不貞の妻、しかし、私は永遠にあなたの妻だわ」<sup>43</sup>と語って、夫への愛を永遠に誓って自殺するのであった。第四幕で李と陳は再びお互いを求め合い、夫婦の絆をもう一度結ぼうとしたが、その望みは彼女自身の「高貴」という高い倫理観と自身の不貞を恥じるという罪悪感によって叶わず、彼女は死をもって夫との絆を「永遠」のものにするのであった。最終幕では、思うようにならない愛情の一断片が悲劇となって象徴されているのである。

『雲雀』は、経済的困窮から束縛のない自由へと抜け出るように飛び立った陳芝慶が自身の不貞を恥じて、自殺するという悲劇の結末となっている。ただ、彼女が探し求めている夫との心理的繋りは、最後の願いとして現世を去ることにより「永遠に」獲得することになる。第一幕で、陳が経済的困窮により理想や人生の指針を失い欠けていた時に、李立人が「嵐のなかで、我々は純潔でなければならない、もっと純潔でなければならない」<sup>44</sup>と言い聞かす台詞がある。この「純潔」とは、作品中日常においてけがれがなく清らかな精神として表出され、執拗に変革を目指している李立人を象徴する言葉となっている。陳は夫の「純潔」さを理解できず、ずっと空虚の中を過ごして来た。市井に暮らし、歴史上の表舞台で決して取り上げられない若い知識人である陳が、最期にやっと「永遠」に愛するという「純潔」な魂を自殺という末路と引き換えに獲得する構図で物語は結ばれている。社会の変革という高い理想を持つ夫と異なり、自身の進む道も定まらない陳にとって、夫婦関係が一旦破綻することで、彼女は「永遠」に夫を愛するという夫婦の絆を強く

結ぶことになるのである。裕福な家庭で「上流階級の教育」を受けた陳は、経済的困窮や心理的距離から夫に理解されないという精神的な試練を乗り越えられず、友人の誘惑に負けて家を飛び出てしまう。が、再度夫を求め、新たな絆を結ぼうと願う一方、厳格すぎる倫理観から自身の不貞を詫びるという二つの矛盾した観念の衝突を上手く解決できず、悲劇への道を選んだ知識人として描かれている。そのような彼女に対して、脚本の末尾は以下のような感慨で幕が閉じられる。

周望海：(前略) 過去と現在の苦しみは円熟をもたらし、将来は希望に満ちている！この時代に、我々には無数の兄弟がおり、彼らは前進し、我々を愛し、理解し、必要としているはずだ！立人はまだ若いし、彼女の神聖で清らかな魂も永遠に安らかに眠るであろうことよ！<sup>45</sup> (傍線筆者)

死をもって「永遠」に愛するという「純潔」さを手に入れた陳芝慶に対して、作者は「純潔」を越える「聖潔」(引用文の傍線箇所の原文。中国語では「神聖で清らかな魂」という意味。)という言葉を語らせている。ここでの「聖潔」とは、自殺と引き換えに陳が手にしたもので、非日常的で、死者の尊厳を冒しがたい清らかな魂を表出している。作品は悲惨な最期を遂げた陳に対して温かい目でもって締め括っている。

『雲雀』は若い知識人たちの「内々の生活上の事件」から生じた苦悩とその悲劇が描かれている。なかでも陳芝慶という女性知識人の経済的困窮から夫の愛情に飢え、破綻していく内面の世界を描き、その歴史上において取り上げられることのない女性主人公が最期に獲得した「聖潔」な魂を描いた作品である。

### おわりにかえて

本稿では、路翎が1946年南京帰郷後から47年6月までに書き留めた胡風宛ての書信を通して、今までほとんど扱われなかった話劇『雲雀』の創作活動を検討してきた。

『雲雀』は、物価高騰や学生運動など作品を執筆していた1946、47年当時の困難な社会状況を作品の素材としている。これらはまず書信で繰り返される社会状況の不安や物価高に対する憤りなど、作家自身の最も注目した関心事を作品に効果的に用いられている。創作の動機としては、南京で知り合った黄若海の影響が執筆の理由として挙げられる。が、路翎の回想文を併せて読むと、抗戦中から文芸大衆化のために、庶民が親しみやすい話劇執筆を胡風が勧めていた記述もあり、『雲雀』は路翎による文芸大衆化への発端の一作であるとも言える。脚本は台詞とト書きにより登場人物の内的心理を表出するだけでなく、女性主人公・陳芝慶を象徴させる歌曲の連携により物語が構成されている。これまで小説



を創作していた路翎にとって、話劇の創作上の苦悩や工夫も読み取ることができた。『雲雀』は「内々の生活上の事件」から生じた若い知識人の苦悩とその破綻が描かれており、なかでも陳芝慶の内面の世界を描き、歴史上では取り上げられない存在とその魂を描いたと言える作品である。

55年の所謂「胡風事件」で、胡風や路翎の私信は反共主義の根拠の一部とされ、彼らは逮捕・投獄されることになる。今回用いた「致胡風書信全編」は当局が逮捕時に没収したことにより、文化大革命などの動乱の災禍から逃れ、2000年代になってようやく全容が明らかになった。本稿は奇しくもその保管された書信により考察することができたのである。

だが、この小論で、話劇『雲雀』をすべて論じきったとは考えていない。今回は例えば、陳芝慶や王品群とは対照的な人物である李立人や周望海、その他登場人物の何人かについてほとんど言及していない。別の機会の課題としていきたい。

## 注

- 1 楊義他編『路翎研究資料』（北京十月文芸出版社、1993年）によると、『雲雀』以外の話劇に、『人民万歳』（1950年）『迎着明天』（天下出版社、1951年8月）『祖国在前進』（上海泥土社、1952年1月）『英雄母親』（上海泥土社、1952年9月）などの作品があげられる。
- 2 主なものに、張耀杰「〈雲雀〉：獨標一幟——關於現代戲劇的一種考察」『中国現代文学研究叢刊』（1994年3期）がある。
- 3 本稿では、路翎「致胡風書信全編」（大象出版社、2004年）に基づいて書信を引用する。本書は1939年から1953年までの346通が掲載されている。また姉妹本にあたる胡風「致路翎書信全編」（大象出版社、2004年）には、1941年から1983年までの137通が掲載されているが、『雲雀』が上演された1947年の書信は1通も載っていない。
- 4 同上、「致胡風書信全編」151頁。
- 5 方珩「苦洪的回憶」『新文学史料』（人民文学出版社、2004年第4期）参照。
- 6 女性主人公・陳芝慶のモデルについては、自殺した阿壠の妻・張瑞とする説がある。前掲「『雲雀』：獨標一幟——關於現代戲劇的一種考察」参照。
- 7 董健主編『中国現代戲劇総目提要』（南京大学出版社、2003年）1603頁、参照。
- 8 胡風「為『雲雀』上演写的」（『胡風全集』第3巻、湖北人民出版社、1999年）383頁。
- 9 劉挺生「一個神秘的文学天才路翎」（華東師範大学出版社、1997年）158頁。

- 10 本稿のテキストは『路翎劇作選』（中国戯劇出版社、1986年）の『雲雀』を使用した。引用箇所は16頁。以下『雲雀』の引用は同書に基づく。
- 11 野口鐵郎編『資料中国史』—近現代編—（白帝社、2000年）134頁参照。
- 12 前掲、「致胡風書信全編」121頁。
- 13 同上、124頁。
- 14 同上、143頁。
- 15 同上、148頁。
- 16 前掲、『路翎劇作選』56頁。
- 17 南京では47年5月15日、南京中央大学、金陵大学、南京国立戯劇專科学学校などの学生たちがデモ行進を行う。さらに、同月20日、南京、上海、杭州などの16の専科学学校以上の学生が南京に集まり、国民政府に学生への教育費や公費の増額など五項目を要求する大行進を行い、珠江路口で国民党反動軍警が学生や共産党地下党員を強打するという事件が起こった。これが俗に言う「南京五二〇運動」である。  
劉曉『1947年「反飢餓、反内戦、反迫害」運動的一些回顧』（共青团中央青運史研究室等編『解放戦争時期学生運動論文集』、同濟大学出版社出版、1988年）27頁～30頁参照。
- 18 前掲、「致胡風書信全編」125頁。ここでの旅行記とは日記「從重慶到南京」（『希望』第二集第三期、1946年7月）を指す。
- 19 同上、131頁。
- 20 同上、143頁。
- 21 同上、146頁。
- 22 胡風「回憶録」（『胡風全集』第7巻、集外編Ⅲ、湖北人民出版社、1999年）682頁。
- 23 路翎「哀悼胡風同志」（『文彙月刊』、1985年）。張業松・徐朗編『路翎晚年作品集』（東方出版中心、1998年）所収、328頁。
- 24 路翎の「大衆化」には劉挺生の指摘がある。前掲「一個神秘的文学天才路翎」157頁参照。
- 25 魯迅「文芸的大衆化」『大衆文藝』第二卷第三期 1930年3月。
- 26 北京魯迅博物館編『胡風主編期刊彙輯』（国家図書館出版社 2010年）（『七月』7期、1938. 1・16）
- 27 『螞蚊小集』之二『予言』（1948年5月）。張業松編『路翎批評文集』（珠海出版社 1998年10月）所収。
- 28 近藤龍哉『[[精読] 路翎「王の家のばあさまと彼女の子豚」（1）』（『中国語』内山書店、1999年8月）、62頁。

- 29 前掲、「致胡風書信全編」145頁（47年4月16日付）。
- 30 同上、146頁。
- 31 前掲、『路翎劇作選』52頁。（括弧内の文はト書きである。以下同様）
- 32 『思郷曲』は作詞・戴天道、作曲・夏之秋、1941年重慶の『音楽月刊』に初めて掲載された。（徐迺翔総主編『中国文芸図志』音楽巻、沈陽出版社、2002年、116、117頁参照。）この場面では少年が『思郷曲』を歌っていることで、王品群が突然「雲雀」を歌うという唐突さを避ける効果が仕組まれており、舞台の自然な流れが保たれている。
- 33 前掲、『路翎劇作選』13頁。
- 34 小田島雄志訳『シェクスピア全集』34巻「シンベリン」（白水社、1983年）64頁。  
詩の本文は以下の通りである。  
「東の空に高らかにさえずるヒバリをお聞きなさい  
お日様ももうのぼってきます  
燃える車を引く馬は花杯の朝露で  
喉の渴きを癒しています  
キンセンカもその眠たげな金の臉を開いています  
こうして美しいものはみな起き出しています お姫様負けずにいそいでお起きなさい」
- 35 前掲、『路翎劇作選』17頁。
- 36 同上、28頁。
- 37 同上、30頁。
- 38 前掲、「致胡風書信全編」149頁。
- 39 前掲、『路翎劇作選』50頁。
- 40 前掲、「致胡風書信全編」149頁。
- 41 前掲、『路翎劇作選』38頁。
- 42 同上、88頁。
- 43 同上、89頁。
- 44 同上、15頁。
- 45 同上、93頁。